

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)

大学院生研究

2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学 研究科	日本文学 専攻
指導教員	所属・職名		氏名
	立教大学文学部 教授		小峯和明 印
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 1名
研究課題名	東アジア孝子説話研究—自己犠牲の孝を中心に—		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科日本文学専攻 3年		金 英 順 印
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名
	文学研究科日本文学専攻 博士後期課程 3年		金 英 順
研究期間	1年	年度	2007年度
研究経費	199,796 円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は東アジア孝子説話研究の一環として、儒教の倫理観から強く否定される肉体損傷をモチーフにする釈迦の本生譚に注目し、孝の問題について追究する。日本では平安初期の唱導資料『東大寺諷誦文稿』を始め『今昔物語集』などに父の病のため眼と骨髄を抜く忍辱太子の釈迦の本生譚が、儒教の『孝子伝』の説話人物と並んで孝養をめぐる故事として語られ、韓国では『釈譜詳節』や『釈迦如来行録』などにこれらの本生譚が孝行の手本として讃えられている。そこで、本研究は自己犠牲をモチーフにする孝子説話を「仏伝」を手がかりに日本と韓国が孝をどう受け入れていたかを考えて見たい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

{ 東アジア } { 仏伝 } { 孝子説話 }

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、釈迦の本生譚として知られる忍辱太子の話に語られる自己犠牲の〈孝〉と、東アジアに広がる父母の治病を主旨とする孝子説話との関わりについて考察してみた。忍辱太子譚は、日本では、本生譚と孝養譚の二つの系統に分けられる。卒塔婆の因縁を説く釈迦の本生譚として語られている『今昔物語集』巻二・四では、医師から父王の病は人の両眼と骨髓を薬にすれば治るといわれ、父のために身を捨てる太子の行為を繰り返し「孝養」と讃えている。その一方で、太子の行為を父のための孝養だけではなく、一切衆生を利益しようとする菩薩道として捉えている。これは、経典にはみえない記述で、太子の父母孝養と一切衆生利益の利他行の両面が強調されている。このような太子が我が身を犠牲にする利他行の話は、名古屋大学蔵『百因縁集』二六「太子抜眼事」にもみられる。病にかかった国の人々のために太子が「利益一切衆生」と誓い、自分の眼を抜いて、人々の病を治す話で、『今昔物語集』忍辱太子譚との類似性が指摘できる。

そして、本生譚型の忍辱太子譚のもう一つの特色としては、物語の改変にみる文飾表現があげられる。鎌倉期の『説経才学抄』「因縁処」や『三国伝記』巻三・一〇、内閣文庫蔵『金玉要集』五・三に語られる忍辱太子の話では、父のため両眼と骨髓をぬいて死に至った太子の死に叙情的な文飾が加えられ、さらに、太子が文殊の過去とされたり、様々な変相をみせる。このような改変は、法会などの教説の場においてこの話が頻繁に語られていた過程を示すとみなせよう。

一方、平安初期の唱導資料『東大寺諷誦文稿』には、忍辱太子譚が孝子伝の人物と並んで語られ、この話が法会の場で言説される孝養譚の先例や規範に相応しい仏教の孝養譚として意識されていたことがうかがえる。ここで忍辱太子譚は、すでに本生譚ではなく、太子の自己犠牲の〈孝〉のモチーフに焦点がおかれた孝養譚に転換されている。また、安居院の唱導書としてよく知られる金沢文庫蔵『言泉集』亡父帖「忍辱太子」にも、亡父の追善供養の表白に、経典からの引用例として忍辱太子の話が説かれている。しかし、『言泉集』は、経典とは違って両眼や骨髓ではなく、自分の肉を割いて薬にしたとある。『言泉集』に説かれる忍辱太子の話も、『東大寺諷誦文稿』と同じく本生譚の枠組みから離れ、報恩や孝養に収束する孝養譚へ転換されていたことが考えられる。また、忍辱太子譚の眼ぬきの自己犠牲の〈孝〉のモチーフは、法華経直談系では観音霊験譚や目眼寺の縁起として語られ、本生譚とは異なるテーマに再生して説かれている。室町期の叡山文庫天海蔵『一乗拾玉抄』巻八「観世音菩薩普門品」では、忍辱太子譚と類似する話が楊柳観音の因縁譚として語られ、『法華経直談鈔』二末・序品・四七「目眼寺因縁事」では、玄奘三蔵が天竺にある目眼寺という寺の由来を尋ねる話として語られる。さらに、浄土宗系『五重聞書』第三種領解之下の俱那羅太子譚にも父王の病を治すために太子が自分の眼をぬいて薬にした話が語られ、忍辱太子譚との類似するモチーフで語られている。本生譚に語られる太子の眼抜き自己犠牲が、父母孝養の重要なモチーフとして語りの場に頻繁に供され、忍辱太子の話と混交しあって語られていたと思われる。

成果の概要 つづき

忍辱太子のように自分の身を犠牲にし、父母の病を治癒する孝子説話は、中国と韓国においても多く伝えられている。中でも自分の肉を割いて父母の薬として供養する話は、『唐書』巻一九五・列伝一二〇「孝友」によると、唐代の『本草拾遺』の影響としている。『唐書』では、父母の病気治療とはいえ、肉体を傷付ける行為は孝の倫理観に反する行為として、批判の論議を載せながら、自分の身を捨てて親を助けることは、誠の心からであり、究極の〈孝〉として捉えられている。また、『宋史』巻四五六・列伝二一五・孝義「王翰」には、目が見えなくなった母のために、自分の右目を抉って母にささげ、母の目が見えるようになったとする孝行譚が伝えられている。さらに、父母のための自己犠牲が単に医術的なものではなく、仏法の靈験がかかわっていたことを示す話も語られ、『太平広記』巻一六八「気義」三には、母の病を治すために自分の股肉を薬にし、火で指を煉り、『法華経』の一部を書写して毎日唱えるうちに、仏の大義に通じたという話が語られている。このように父母の治病のため我が身を犠牲にする行為は、儒教の孝観念から否定されながらも、孝行の手本として意識されていた。その背景には、『本草拾遺』など本草学書の人肉に関する言説が影響しているとともに、仏教の普及にともない、本生譚や菩薩行の物語が、儒教と融合して語り伝えられたことにも起因するだろう。

韓国では、忍辱太子の話は、朝鮮王朝時代の王族の追善供養のために編纂された『釈譜詳節』(1449年)巻十一と、『月印釈譜』(1457年)巻二十一に語られている。『釈譜詳節』は、『大方便仏報恩経』をもとに縮約したもので、『今昔物語集』や日本の唱導資料では語られなかった、忍辱太子と太子を憎む六人の大臣との対立がみられる。一方、『月印釈譜』は、経典を忠実に訓読しながら、『釈譜詳節』にもとづいて釈を付している。朝鮮王朝時代、儒臣勢力による崇儒排仏の政策の強化が主張される中、王族の追善仏事が行なわれ、『釈譜詳節』などの仏書が編纂刊行され、内裏で歌唱されていたことは、衰退していた仏教が王室を基盤に復興する契機をなしていた。十五世紀以降、再び儒臣勢力の崇儒排仏が強化され、仏書の刊行は衰退していくが、『釈譜詳節』などの仏伝を隠れ持って愛読し、僧を招いて説経を行なう儒臣たちも少なくなかった。法会や説経の場において、亡親の菩提を祈り、仏教の孝の典型として、人々に感動と共感を与える仏伝の話が説かれていたことが充分推測できる。『釈譜詳節』や『月印釈譜』が亡父母と亡児の追善のために編纂されたこともあわせて考えると、説法場に釈迦の本生譚が繰り返し語られ、その中に忍辱太子などの話も人々の心の琴線にふれる孝養譚として唱導されていた可能性が高いと思われる。

忍辱太子譚のように、自分の肉体を傷つけ、父母の命を助ける話は、高麗末期に編纂された『三国史記』や『三国遺事』を始め、『三綱行実図』『東国輿地勝覧』等の朝鮮時代の諸資料に散見する。中でも、『朝鮮王朝実録』中宗二一年(1526年)七月二五日条には、『三綱行実図』の先例を見て、そこに登場する孝子のように自分の指を斧で切って薬にして父の病を治癒させたという記事がみえ、孝子説話の孝行を真似する者まで現れたという。

以上のようにほぼ同時代の東アジアの諸地域で同じ説話が多彩に語られていたことが確認できた。今後、さらに、「仏伝」を軸に東アジア孝子説話への影響や享受、再生などの問題について広く追究していきたいと思う。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

- ①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
- ②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
- ④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

【既発表論文】

- ①「『平家物語』後白河院周辺考―平業忠の登場をめぐって―」（お茶の水女子大学『国文』九十二号、二〇〇〇年九月）
- ②「延慶本『平家物語』における君臣関係―後白河院と平重盛の場合―」（お茶の水女子大学人間文化研究科『人間文化研究年報』二十五号、二〇〇二年三月）
- ③「東アジアの孝不孝説話考―『注好選』を中心に―」（立教大学『日本文学』九十六号、二〇〇六年七月）
- ④「『平家物語』にみる「孝養」と「報恩」―中世の語史から―」（立教大学院『日本文学論叢』六号、二〇〇六年八月）
- ⑤「東アジアの孝子説話にみる自己犠牲の孝―須闡提太子譚を中心に―」（立教大学院『日本文学論叢』七号、二〇〇七年八月）
- ⑥「東アジアの孝子説話にみる自己犠牲の〈孝〉―忍辱太子譚を中心に―」（『佛教文学』三二号、二〇〇八年四月）
- ⑦「東アジア孝子説話にみる異国再会譚―「燈台鬼」と「金遷」説話を中心に―」（『アジア遊学』二〇〇八年夏予定）

【学会研究発表】

- ①「『平家物語』における「孝養」中世文学会秋季大会（於同志社大学）二〇〇三年十月二十五日）
- ②「忍辱太子譚をめぐって―東アジアの孝子説話―」佛教文学会大会（於京都女子大学）二〇〇六年九月二十三日）
- ③「東アジア孝子説話にみる異国再会譚―「燈台鬼」と「金遷」説話を中心に―」（国際シンポジウム「東アジアの日本文学研究」（於韓国外国語大学校）二〇〇七年十一月三日）